

六回目のメシア的奇跡と指導者層の糾弾

□前回までのハイライトとのつながり

リトリート（退避、休息のための旅行）：紀元 29 年の春から異邦人地域へ 4 回

目的は弟子訓練：イエスをメシアであり「**神一人**」であると理解するように

1 回目のリトリートからの帰りには、イエスの湖上歩行の奇跡（マタ 14：22～33）

弟子たちは「まことに、あなたは神の子です」と言って、**イエスを礼拝した**。



異邦人地域へのリトリート 4 回目 ピリポ・カイサリア

ペテロの信仰告白と**イエスの変貌**

あなたはキリスト、神の子、生けるお方です

ヘルモン山のふもと

変貌（イエスの姿が光り輝く）は山の上で



山から下りて来て

四回目のメシア的奇跡による弟子訓練

使徒の権威を用いるための祈りと信仰

口をきけなくする悪霊の追い出し ヘルモン山のふもとにて

リトリートの締めくくり

メシア的奇跡を使徒たちもできる！



リトリート終了 カペナウムに帰還（北のガリラヤ地方、ガリラヤ湖の北側の町）



紀元 29 年秋 仮庵の祭りのために、エルサレム（南のユダヤ地方、神殿のある都）へ

神性宣言と**五回目のメシア的奇跡**

10 月の仮庵の祭りにて

生まれながらの盲人の癒やし

十字架の死まで、あと半年

神性宣言・・・・・・・・・・イエスを神として信じなければ罪の中で死ぬ

癒やされた盲人は・・・・「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した

仮庵の祭りの結末は・・・人々は、「神を冒瀆している」としてイエスを死刑にしようとしたが、イエスは彼らの手から逃れた。

七十人の弟子たちを派遣してユダヤ地方とペレア地方の信者の所在を確認

イエスと弟子たちは、それらの信者の家々を滞在先としながら、翌年春まで転々とする



六回目のメシア的奇跡と指導者層の糾弾

10 月の仮庵の祭りの後、ユダヤ地方で

口をきけなくする悪霊の追い出し

その日のうちにパリサイ人の家に食事に招かれ、その席にて

□アウトライン

A) 六回目のメシア的奇跡

B) 指導者層の糾弾

A) 六回目のメシア的奇跡

1. 悪霊の追い出しと群衆の反応（ルカ 11：14～16）

14～15 節 さて、イエスは悪霊を追い出しておられた。それは口をきけなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口がきけなかった人がものを言い始めたので、群衆は驚いた。しかし、彼らのうちのある者たちは、「悪霊どものかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ」と言った。

- 口をきけなくする悪霊・・・この種の悪霊を追い出すことができたなら、それはメシアであると、ユダヤ教ラビたちは民衆に教えていた。神学上、このような奇跡を、他の奇跡とは区別して「メシア的奇跡」という。イエスが行った「メシア的奇跡」は全部で 7 回、その中で、この種の悪霊の追い出しを、イエスは 4 回行った。1 回目と 2 回目はガリラヤ地方で行い、指導者層の反応が記録されている。3 回目は異邦人地域のピリポ・カイサリア地方、ヘルモン山のふもとで弟子訓練のために行った。今回は 4 回目、ユダヤ地方において、一般民衆の反応が記録されている。
- 悪霊どものかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ・・・イエスをメシアとは認めない立場からの説明。1 回目と 2 回目で指導者層がこじつけた説明と同じである。メシア拒否が民衆レベルにまで広がっていることを示す。

16 節 また、ほかの者たちはイエスを試みようとして、天からのしるしを要求した。

- 1 回目で指導者層が他のしるしを求めたのと同じ態度。参照、マタ 12：38

2. イエスの反論（ルカ 11：17～26）

- 1 回目で指導者層に反論したのと同じ内容。参照、マタ 12：25～30、43～45

3. 霊的な家族関係こそ幸いである（ルカ 11：27～28）

4. イエスを拒否した「この悪い世代」に対する警告（ルカ 11：29～32）

- 1 回目で指導者層に警告したのと、同じ内容。参照、マタ 12：39～42

5. 明かりのたとえ話（ルカ 11：33～36） イスラエル民族全体に対する呼びかけ

33 節 だれも、明かりをともして、それを穴蔵の中や升の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。入って来た人たちに、その光が見えるようにするためです。

- 燭台の上に置かれた明かり（手持ちランプ、ともしび皿）は、イエスである。ともされた光は、イエスのことばである。
- イエスは、父なる神からのメッセージを、明確にイスラエルの人々に語ってきた。しかし、イスラエルは拒絶した。

34 節 からだの明かりは目です。あなたの目が健やかなら全身も明るくなりますが、目が悪いと、からだも暗くなります。

- からだの明かりは目です・・・人のからだのともしび皿は、「目」（定冠詞付きの単数形）である。この目は、霊的な目である。
- あなたの目が健やかなら・・・霊的な目が開かれていて、イエスのことばを受け入れるなら
- 全身も明るくなる・・・からだが明るいとは、光の中を歩むこと＝神を信じ、神のみこころに従って生活すること
- 目が悪いと・・・霊的な目が閉ざされていて、イエスのことばを受け入れないなら
- からだも暗くなる・・・からだが暗いとは、闇の中を歩むこと＝自分の欲を満足させることを第一とし、自分の内にある罪の性質に従って生活すること

35 節 ですから、自分のうちの光が闇にならないように気をつけなさい。

- 「闇にならないように」の訳文は、直訳すると「闇ではないように」
- イスラエルは自分の内側が明るいつもりでいるが、イエスのことばを受け入れないのは、闇の中にいるからである。自分が今、光の中にいるのか、闇の中にいるのか、よく見なさい、という警告。

36 節 （ですから）もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、明かりがその輝きであなたを照らすときのように、全身が光に満ちたものとなります。

- もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら・・・もし、イスラエルが光の中を歩むなら＝民族的救いを受けるなら
- 全身が光に満ちたものとなります・・・直訳すると「すべてが明るいものとなるであろう（未来形）」。内側（霊的）だけでなく、外側（からだ）のいのちも保たれる。社会には平和と正義。被造世界は呪いを解かれ、肉食獣は草食に戻り、農地に雑草や病害なし。メシアの王国は光に満ちた時代。

B) 指導者層の糾弾

1. その日、あるパリサイ人からの招き（ルカ 11：37～41）

37 節 イエスが話し終えられると、一人のパリサイ人が、自分の家で食事をしていた
だきたい、とお願いした。そこでイエスは家に入って、食卓に着かれた。

- 一人のパリサイ人・・・名は不明。そのときイエス一行が滞在していた村の有力者であろう。パリサイ人とは、ユダヤ教パリサイ派に属する人。パリサイ派は、旧約聖書の中のモーセの律法を完全に守るためには、どうしたらよいのか議論を重ね、論理的に考えをつきつめて、膨大な細則（こまかな、具体的な規則）を制定し、それを民衆に教えていた。これを「言い伝え」とか、「口伝律法」という。以下では、口伝律法と呼ぶ。
- 自分の家で食事をしていただきたい・・・その目的は、イエスを非難する問題点を見つけるため。すでにパリサイ派などのユダヤ指導者層は、イエスをメシアではないと判定し、イエスは悪霊につかれていて悪霊のかしらの力によって奇跡を起こしているだけだ、との見解を全国に発表していた。先の出来事では、イエスがまたメシア的奇跡を行ったが、群衆は指導者層の見解に従い、イエスについていかなかった。しかし、いつ群衆の気持ちがイエスになびくか、不安である。イエスを食事に招いて何か非難できる口実を見つけよう、というのが目的であった。

38～41 節 そのパリサイ人は、イエスが食事の前に、まずきよめの洗いをなさらないのを見て驚いた。すると、主は彼に言われた。「なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や皿の外側はきよめるが、その内側は強欲と邪悪で満ちています。愚かな者たち。外側を造られた方は、内側も造られたではありませんか。とにかく、内にあるものを施しに用いなさい。そうすれば、見よ、あなたがたにとって、すべてがきよいものとなります。

- きよめの洗い・・・きよめの洗いとは、食事の前に手を洗い、杯や皿も洗う、という儀式である。モーセの律法の中には、きよめの洗いに関する規定はない。これは、パリサイ派が作った口伝律法の中だけで定められている。衛生上の目的ではなく、モーセの律法の中での食物規定により禁止されている物を絶対に食べていないと断言できるように、である。パリサイ派が制定した口伝律

法によって定められていて、民衆にも「言い伝えを守って、思わぬ汚れを受けないようにしなさい」と教えていた。ここで言う「汚れ」とは、不衛生とか、ばい菌に汚染されているとかではなく、モーセの律法の食物規定では口にすることはならない何かが、手や食器に付着しているかもしれない、万一それを口に入れてしまっただけでは儀式的汚れを受けてしまい、神殿での祭儀に参加できなくなる、という意味の汚れである。

- 外側を造られた方は、内側も造られたものではありませんか・・・神は人を物質的部分である外側のからだ、非物質的部分である内側の霊魂とに造られた。パリサイ人は外側をきよめることばかり言うが、内側が貪欲をはじめとする罪の性質からきよめられることこそ大切なのに、それを忘れていて。

2. パリサイ人に対する 3 つの「わざわざいだ」と律法学者からの抗議（ルカ 11：42～45）

42～44 節 だが、わざわざいだ、パリサイ人。おまえたちはミント、うん香、あらゆる野菜の十分の一を納めているが、正義と神への愛をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならないことだ。

わざわざいだ、パリサイ人。おまえたちは会堂の上席や、広場であいさつされることが好きだ。

わざわざいだ。おまえたちは人目につかない墓のようで、人々は、その上を歩いても気がつかない。」

- 人目につかない墓・・・モーセの律法では、「死人、人の骨、墓に触れる者はみな、七日間汚れる」（民数記 19：16）と規定され、墓に触れた人は、儀式的汚れを受けたことになり、神殿の儀式への参加が制限された。当時、死者の埋葬にあたっては、裕福な人は横穴式の石室を設けた墓を造ったり、洞くつのある土地を買ってその洞くつを墓にしつらえたりした。他方、貧しい人は地面を掘って、50 cm 四方、深さ 180 cm 程度の縦穴を墓にして、その中に遺体を埋葬した。そのように地面に掘られた縦穴が「人目につかない墓」である。人々はその上を歩いても気がつかない。そして何事もなかったかのように神殿の儀式に参加してしまう。
- イエスは、パリサイ派を「人目につかない墓」とかけて、人々を気が付かないうちに汚している、とした。パリサイ派が作った口伝律法に、旧約聖書に書かれた律法（真の神のことば）以上の権威をつけて教え、人々を気づかぬうち

に神から遠ざけている、と、イエスはパリサイ派を糾弾したのである。

45 節 すると、律法の専門家の一人がイエスに言った。「先生。そのようなことを言われるなら、私たちまで侮辱することになります。」

- 私たちまで侮辱する・・・口伝律法を作ることには、パリサイ派だけでなく、律法学者たちも深く関与していた。

3. 律法学者に対する 3 つの「わざわざいだ」(ルカ 11 : 46～52)

46 節 しかし、イエスは言われた。「おまえたちもわざわざいだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本触れようとはしない。

- 負いきれない荷物・・・パリサイ派と律法学者たちによって作られた口伝律法を指す。負いきれないとは、当時のユダヤ人たちの日常生活を事細かに規則でしぼり、民衆にとっては大変な重荷になっていたこと

47～51 節 わざわざいだ。おまえたちは預言者たちの墓を建てているが、彼らを殺したのは、おまえたちの先祖だ。こうして、おまえたちは先祖がしたこと証人となり、同意しているのだ。彼らが預言者たちを殺し、おまえたちが墓を建てているのだから。だから、神の知恵もこう言ったのだ。『わたしは預言者たちや使徒たちを彼らに遣わすが、彼らは、そのうちのある者たちを殺し、ある者たちを迫害する。それは、世界の基が据えられたときから流されてきた、すべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。アベルの血から、祭壇と神の家の間で殺されたザカリヤの血に至るまで。』
そうだ。わたしはおまえたちに言う。この時代はその責任を問われる。

- アベルの血からザカリヤの血に至るまで・・・創世記 4 : 10 アベルの殉教、歴代誌第二 24 : 21 ゼカリヤの殉教。ヘブル語聖書では最初の巻が創世記、最後の巻が第二歴代誌、よって、時代順ではゼカリヤの後にも殉教した預言者はいたが、ヘブル語聖書の順序では、ゼカリヤが最後。
- この時代はその責任を問われる・・・紀元 70 年のエルサレム陥落を指す

52 節 わざわざ、律法の専門家たち。おまえたちは知識の鍵を取り上げて、自分はいらず、入ろうとする人々を妨げたのだ。」

- 知識の鍵・・・神のことば。旧約聖書に記された神のことばこそが知識の鍵である。律法学者はヘブル語聖書（旧約聖書）の専門家のはずなのに、人々に聖書そのものを教えず、パリサイ派といっしょになって、口伝律法を作ってそれを人々に教えた。そして、ヘブル語聖書のメシア預言のとおりイエスが現れたのに、認めなかった。
- 入ろうとした人々を妨げた・・・メシア拒否を民衆レベルにまで広げた

4. イエスに対する指導者層の激しい敵意（ルカ 11：53～54）

53～54 節 イエスがそこを出て行かれると、律法学者たち、パリサイ人たちはイエスに対して激しい敵意を抱き、多くのことについてしつこく質問攻めを始めた。彼らは、イエスの口から出ることに、言いがかりをつけようと狙っていたのである。

- 激しい敵意を抱き・・・指導者層はイエスのあらさがしに躍起になるうちに、感情的にも自制できない状態に陥っていった。

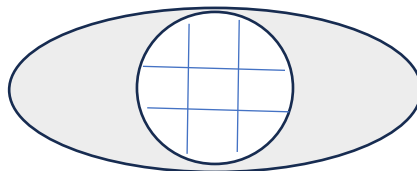
(補足) ルカ 11 : 34 あなたの目 (単数形) が健やかなら

直訳すると、「一重なら」。英語訳では single

ギリシア語ハプロウス、数としての「一つ」ではなく、いくつかあったとしてもそれらが重なり合っただのひとつを指す。

背景：当時のユダヤ教ラビたちによる「霊的な目」についての教え・・・

霊的な目 (単数形) は 9 つのパーツから成る。パーツの種類は 2 種類で光と闇。9 つのうち、6 つが光なら、その人の目は「良い目」で、その人は善良な部類に入る。9 つのうちひとつしか光がないなら、その人の目は「悪い目」で、その人は悪人の部類に入る。



この教えでは、霊的な目は、光の度合いが、「0 ～ 9」の 10 段階に分けられる。

イエスの教え：霊的な目が一重であるなら・・・

よって、パーツがいくつあるとか、そのような議論は無用。

灯されているか、いないか。 光か、闇か。

いずれかである。中間はない。

⇒ 霊的な目が開かれているか、閉ざされているか。

神を信じるか、信じないか。

イエスをメシアとして認めるか、拒否するか。

いずれかである。中間はない。

